

第五章

アドリブの段取り

では、実際にアドリブの段取りを組んでいくことにしましょう。何度も述べているように、最初のうちは、段取りを決めてアドリブに臨んでも全然構いません。そこから徐々にアドリブの要素を増やしていけばいいのです。

どのように段取りを組めばいいのか、それは第三章で考察した「演奏内容の方向性」がヒントとなります。アドリブには、「ひと盛り上がり作る」という暗黙のルールがあると述べました。それを軸にして、いくつかの場面を設定してみましょう。

<導入>

ソロの入り口です。テーマから入るか、別の人のソロの後に入るかはそのときそのときで異なりますが、最初はさりと自然に始まるのが理想です。とはいえ、「つかみ」も重要です。聞き手の好奇心を刺激し、

『これからどんなソロが始まるんだろう?』

と、ワクワクさせるような場面にしたいものです。また、<導入>部はあまり長々と続けるべきではありません。あくまでさりと、それでいてしっかりと「つかみ」のある場面にしましょう。

<発展>

<導入>部で数コーラスが過ぎ、そろそろ次の展開へと移行したい場面です。<導入>部よりはもう少しがっつりと、ここからの展開を期待させるような場面にしたいものです。かといって、ここで盛り上げすぎでは次の<高揚>部が殺されてしまいます。ここはあくまで<高揚>に向かうための場面です。

なお、少し実験的なことをしてみたい場合は、この<発展>部で試すべきでしょう。出だしの<導入>部や、盛り上がる<高揚>部でしくじってしまうと問題がありますが、この<発展>部なら少々失敗してもまだ挽回の余地があるので、思い切ってチャレンジできます。

＜高揚＞

ここが「ひと盛り上がり」させる箇所です。アドリブが最高潮に達するところであり、全てはここに来るための前フリです。＜発展＞部の前フリからつなげて、遠慮せず、思いっきり盛り上げたところです。どうやって盛り上げるかはまだ後ほど説明します。長さは1コーラス程度で十分でしょう。

＜終息＞

ここでアドリブが終わります。さっき最高潮に達した＜高揚＞部の熱が冷めないうちにさっと終わらしましょう。一番分かりやすいのは、＜高揚＞部の最後の数小節で＜終息＞に向かうことです。また、自分のソロが終わるということを、共演者に伝えることも重要です。なんとなくフェイドアウトしていくのではなく、あくまでさっと終わるように心がけましょう。

と、分かりやすいアドリブは、全体でこのような流れになっているのではないのでしょうか？ ポイントは徐々に盛り上がっていき、後半で最高潮に達し、さっと終わることです。もちろんこれ以外にもいろんな段取りが考えられますが、まずは上記の流れに従ってアドリブしてみましょう。

このように、段取りとして場面を設定しておくことで、アドリブがガールトークになったり、どうでもいい出来事の報告になったりすることを回避できます。そして、ここからが重要なところ、本書の目玉です。

実際のアドリブは、これらの場面場面に合ったフレーズ、場面場面の趣旨を的確に表現できるフレーズを選び、当てはめていくのです。ここが他の教本やアドリブ法と決定的に違うところです。本書で提唱する筆者のアドリブ法は、「段取り先行型」です！

では、場面に合ったフレーズとは、どういったものなのでしょう？ これはそれほど難しくはありません。

例えば、＜導入＞部。ここでいきなり、音を目いっぱい詰め込んだ速弾きフレーズを出すことは可能でしょうか？ もちろんNGです。大丈夫だと思う方は、少し音楽的センスを磨く必要があります。＜導入＞部では、説明の通り、音数の少ない、さらっとした軽いフレーズが相応しいだろうと簡単に推察できます。そして、そのイメージに見合ったフレーズを探してくるなり作るなりします。＜発展＞部では、もうすこし（文字通り）発展的なフレーズが必要となるので、＜導入＞とは違ったものがが必要です。実験的な試みも可能です。そして、次の＜高揚＞で、速弾きなどの音数の多いフレーズをこれでもかを使って場면을盛り上げます。

フレーズ先行型との違い

この、段取りを組み、それぞれの場面にフレーズを当てはめるという手法が、今までの「フレーズ先行型」のアドリブ法とどのように違うのか？

従来の手法ですと、ただ
『フレーズを○個持っている』
『手癖を○個持っている』

というだけでした。例えるなら、一つの大きな引き出しの中に全てのフレーズをぶちまけた状態です。これでは何が入っているかも分かりませんし、それらをいつ、どこで使えばいいのかも分かりません。ですから、「ここぞ!」というときに出てこなかったり、あるいは全然見当違いのフレーズを出してきてしまったり、という混乱が起こっていたのだと推察されます。その結果が、「個々のフレーズはカッコいいけど、全体としてはいまいちなアドリブ」です。

しかし、まず段取りを組み、場面を設定して、それぞれの場面に最適なフレーズを作って準備しておく、という手法だと、どのフレーズにどんな意味があり、どこで使うのが整理された状態でストックすることができるのです。例えるなら、用途別に細かく分類された引き出しに、それぞれのフレーズがきちんと仕分けされている状態です。これだと、どこに何が入っていて、いつ出せばいいのかがはっきりしているので、余裕を持ってアドリブに臨むことができます（まあ、それには経験も必要ですが・・・）。

『でも、これだと結局＜作ったソロ＞にしかならないのでは？』

そう思うのも当然です。では次章でその疑問を解決しましょう。長々と説明してきたアドリブ法の説明も、次で最後です。